ノヴゴロド白樺文書

B・Л・ヤニン[1]
松木栄三訳

訳者解説

ロシア科学アカデミー会員でモスクワ大学歴史学部考古学講座の教授でもあるヴァレンチン・ラウレンチエヴィチ・ヤニン氏は、木簡学会の招きで一九九五年一一月末に来日され、同年一二月三日、奈良国立文化財研究所で行なわれた定例大会でノヴゴロドの白樺文書について講演された。来日の際、ヤニン氏は学会での口頭報告用の短い原稿（この邦訳は学会当日参会者に配布された）のほか、印刷するための原稿として口頭報告用の約二・五倍の長さ（三四ページ）のものを準備されていた。この原稿の内容は、基本的な点では学会報告に沿っているが、口頭報告では不可能だった細部にわたる説明や詳しい紹介を含んでおり、学会報告では触れられていない論点や内容も多々盛り込まれている。また、学会での口頭報告には内容の小区分は無かったが（学会当日に配布された口頭報告にあった小見出しは便宜のため翻訳者が付したものである）、この印刷用原稿には次のような八項目の小見出しが著者自身の手で付されている。

(一) 白樺文書の記録手段ならびに白樺文書が文化層中に保存された諸条件
(二) 白樺文書の年代
(三) 白樺文書と古文書学の諸問題
(四) 考古学的遺物複合体の一部としての白樺文書
(五) 白樺文書と読み書き能力
(六) 白樺文書の歴史的意義
(七) 白樺文書と北西ロシアのスラヴ人定住問題
(八) 一九九三年発掘で話題を独占したのは…

本文中で白樺文書に言及したりテキストを引用したりする場合、著者はこれまでに刊行された文書資料集に付された発見順の連続ナンバーを示して文書を特定している。一九五一年から一九九六年の発掘シーズンの終りまでに出土した七七五通のノヴゴロド文書のう

ち、一九八九年までの文書七一〇通は、論文の末尾に列挙されている九冊の『ノヴゴロド白樺文書』で刊行ずみであり、各巻で刊行された文書の番号も併せて示されているので参照されたい。しかし一九九〇年以後今年までの文書（№七一一―七七五）については、まだ正式には刊行されていない。但し、末尾文献リストの最後に掲げられた二点の文献には、最近五年間（一九九〇―一九九四）に出土した文書の網羅的な紹介があるので、現在我々がまったく見ることができない文書テキストは一九九五年と一九九六年の発掘分だけに限られている。

著者が論文末尾にリストアップしているのは白樺文書の刊行資料だけであるが、中世都市ノヴゴロドに関する諸分野の研究文献は非常に多く、白樺文書研究を含む考古学と歴史学関連の文献目録はこれまでに合計三冊が刊行されている。ヤニン教授たちの発掘研究グループに属するガイドゥコフ氏の手になるもので、一九一七年から一九九五年までのロシアおよび外国での研究成果を広く網羅しつつ、三冊合計で約四〇〇〇点の文献がリストアップされ、その内容についての簡単な紹介がなされている。本論文中で著者は関連する研究文献への言及などはほとんど行っていないので、白樺文書についてのより詳しい文献情報を求める向きや、中世都市ノヴゴロドの歴史と考古学に関心のある方にはこれら三冊の参照をお勧めしたい。

1　Археология Новгорода: Указатель литературы, изданной с 1917 по 1980 гг. Сост. П. Г. Гайдуков, М., 1983.（『ノヴゴロド考古学　研究文献目録一九一七―一九八〇年』Π・Γ・ガイドゥコフ編集　モスクワ　一九八三年）

2　Археология Новгорода: Указатель литературы 1981–1990 гг. Сост. П. Г. Гайдуков, М., 1992.（『ノヴゴロド考古学　研究文献目録一九八一―一九九〇年』Π・Γ・ガイドゥコフ編集　モスクワ　一九九二年）

3　Археология Новгорода: Указатель литературы 1991–1995 гг. Дополнения к указателям за 1917–1990 гг. Сост. П. Г. Гайдуков, Новгород, 1996.（『ノヴゴロド考古学　研究文献目録一九九一―一九九五年』Π・Γ・ガイドゥコフ編集　ノヴゴロド　一九九六年）

なお、本論文には原著者による註は一切付されていないが、日本の読者には余り馴染みがない人名、地名、判りにくい事項などのうち重要と思われるものについては翻訳者の判断で適宜簡単な訳註を付すことにした。但し、訳註中の説明に関連して参照すべき文献や、訳註に利用した文献などを示してゆくと繁雑になるので、それらは一切省くこととした。またロシア語の原文は本文中の用語で避けられない最低限度のものだけに限り訳語の後の（　）内に示した。なお、原語を示した以外の（　）内は原著者が付したもの、［　］内は訳者が補ったものである。

（松木栄三）

ノヴゴロド白樺文書

一九五一年七月二六日、アルテミイ・アルツィホフスキーが指揮[2]をとるノヴゴロドでの考古学的発掘において、一四世紀と一五世紀の境界の地層から最初の白樺文書が発見され、同年の発掘シーズン中にさらに九枚が発見された。そのときから四〇年以上の年月が経過したが、この間に出土白樺文書の数は年ごとに増えていき、一九九五年の発掘シーズンの終りにノヴゴロドのコレクションは七五九枚を数えることになった。[3]この間に、白樺樹皮に書かれた同様の文書はノヴゴロド以外でも八つのロシア都市で発見された。スターラヤ・ルサで二六枚、[4]スモレンスクで一三枚、[5]プスコフで八枚、[6]トヴェーリ及びウクライナの古い都市ズヴェニゴロド[7]で二枚ずつ、[8]モスクワ、ヴィテプスク、[9]ムスチスラヴリ[10]（最後の二都市はベラルーシの都市）[11]でそれぞれ一枚ずつである。こうして、白樺文書は大量的性格を帯びた考古学的遺物の一カテゴリーとなった。白樺文書は中世ロシア史の基本史料の一つとして定着することになり、これまでに、文書テキストの具体的な研究を試みたり、あるいは白樺の記録の発見自体の一般的評価を行うなどの文献の数はすでに著しい数にのぼっている。

白樺文書の記録手段ならびに白樺文書が文化層中に保存された諸条件

白樺樹皮は、通常は文字を書く材料として利用するために特別な加工が施される。紙片として利用する白樺樹皮の葉脈は最低限度に抑えなくてはならない。樹皮の内側からは内皮の脆い層が取り除かれ、外側ではかさかさした表面の層が剝がされた。民族学的な実例が示しているように、灰汁を混ぜた水の中で煮沸すると、白樺樹皮の弾力性が増す。しかし、加工されていない白樺樹皮や、或は使い古した樹皮製品（例えば編籠の底板樹皮）を利用して書かれたテキストも少なくはない。大部分のテキストは樹皮の内側の面に書かれているが、ときには外側の面、あるいは両面に書かれた文書も見つかる。文字は、骨製ないし鉄製のスティロスの先端で樹皮の表面を圧し潰して書かれた。今日知られている八一二文書のうち、インクで書かれていたのは二枚だけである。[12]

スティロス（ノヴゴロド及びその他の諸都市で発見された数はすでに数百点に及ぶ）は、先の尖った軸ペンで、軸の他方の端は偏平なヘラ型をしている。[13]このような形をしているのは、この筆具が二つのものに文字を書く機能を担っていたからである。これを使って一つには白樺樹皮、もう一つにはツェーラ、つまり蠟板に文字を書いたの

である。蠟板はノヴゴロドの発掘で幾度となく発見されており、一例だけだが、板に、蠟だけでなく蠟の上に書かれた文章の一部が残っていたケースもある。スティロスのヘラの部分は、ツェーラの上に書かれた文字がもう必要でなくなったとき、表面を平らにして消すために使われた。樹皮の内側の面を使うことが多かったのは、内側の方が弾力性に富み文字の線を刻むのに適した条件を備えていたからである。この特徴は考古学者にとってもう一つの便宜を与えることになった。白樺樹皮が自然に巻きついた場合、内側を外にして反るので、発見された樹皮に無理な力を加えることなく文書のテキストが発見されることがしばしばだった。巻きついた樹皮の表面にテキストが見えていることがよくあるのである。

白樺樹皮が自然の状態で長く保存されるための唯一つの条件ははっきりしていて、なるべく早い時期に湿り気の多い地中の環境に入りこむことである。空気中では、白樺樹皮が乾燥していく際に、樹皮の諸層が不均等に緊張するため急速に巻きつき、割れてくずになり、筋の状態に分解していってしまう。白樺樹皮は、記録を長く保存することを目的とした材料ではなかった。白樺樹皮の手紙を受け取った人は、その内容を知ると手紙を捨てる。それが泥のなかに落ちて湿った地中にすっかり入り込んだという状態の場合にのみ、白樺樹皮は第二の生命を得て、我々の時代にまで生き延びる可能性を得るのである。このことは、本来の目的である樹皮上の記録そのものにもあてはまる。記録のために白樺樹皮を選ぶということ自体、その記録そのものが短期的な目的のものであることを意味している。長期的に使われる記録には、おそらく羊皮紙が選ばれたからである。

この点についてここで少し詳しく述べるのは、中世に白樺樹皮文書［を長期に保存しておくための—訳者］アルヒーフが存在した可能性がある、と主張する研究者のあり得べき推定に反論しておくためである。ノヴゴロド白樺文書の発掘の経験は、そのような仮説とまっこうから対立している。これまでに出土したすべての文書では、その文書が埋っていた文化層の地層学的年代と、それとは別の方法で（古文書学的ないし人名学的に）推定される年代とが完全に一致している。その一例として役立つのが貴族ミシニッチイ一族の数多い白樺文書群で、[14] この一族の家長たちはノヴゴロド年代記の記録によってよく知られている。発掘の過程で、この一族に属する六世代の人々が、一四世紀初めから一五世紀半ばまでの期間に書いたり受け取ったりした文書が出土した。この期間に三メートルの厚さの文化層が堆積し、それは次々に交代する屋敷地複合遺物群の合計一〇の層に区分される。従って、一四世紀初めに住んでいた人物の白樺文書はその時代に照応する層から発見され、一五世紀半ばに生きていた者の文書はその三メートル上の層から出土するのである。

文化層の含む水分は非常に多いために、地中に井戸や地下倉庫が掘られることはなかったし、家も地中に掘り下げることなく、地上

の土台を使った構造物として建造された。小さな穴が掘られたとしても、古代の遺物を大きく年代移動させることはなく、せいぜい半世紀の範囲内でしかなかった。こうした事情から判るように、白樺文書の地層学的年代づけは、特にそれが遺跡から採取される多量の材木の年輪法的分析[15]によって確認される場合には、非常に高い信頼性をもつのである。この地層学的年代確定法と伝統的な年代確定法[16]の結合は、どの発掘においても優れた結果を出している。

このように、白樺文書がノヴゴロドで大量に発見されるのは、何らかの古代のアルヒーフが出土した結果ではない。文書は様々な地層水準から出てくるものであり、都市のさまざまな場所から発見されているのである。しかしこのことは、白樺文書が文化層のなかに多少とも均等に分布していることを意味するものではない。ある屋敷地には多く、別の屋敷地ではまったく出土しない場合があるし、同一の屋敷でも、ある時代の層からは数十点発見されたのに、別の時代にはごく少数しか出ないか、まったく発見されないといったケースもある。かかる不均等性は、いかなる意味でも文化層の物理的条件によるのではない。それは専ら、ある特定の地層の時代に、ある特定の屋敷に住んでいた住民の全般的な知的水準に依存していたし、最終的にはその居住地の経営の性格などに左右されるものだった。

とはいえ、四〇年にわたる白樺文書の探究の経験から、まだノヴゴロドの文化層から引き出されていない文書のおよその数を推定することができる。現代のアスファルトの都市の下に眠っている文書は二万点を下らない。[17]

一二世紀半ばにノヴゴロド人のキリク[18]という人物が主教のニフォント[19]に「文書の上を足で踏みつけて歩くことは罪ではないのか」という質問をした。もし誰かが文書を破いて棄てたのだとすると、文書はすでに読まれたあとのことではないだろうか。この質問は第六回世界公会議の規則にその源があるにしても、地面に棄てられた少なからぬ文書の上を人々が歩いていたノヴゴロドの現実を反映しているのではないかと考えられる。

白樺文書の年代

白樺文書が様々な年代の地層水準に属し、しかも実質的にこれらの地層水準とのみ結び付いているという事実は、すでに述べたように、これら文書の時代確定に専ら地層学的方法の採用を可能にする。ノヴゴロドの特殊性は、都市的建造物が水を通さない厚い粘土層の底土の上に生まれたことにある。そのために、雪解け水や雨水などによる地中の水分が文化層に過度の水気を与えて通気性を奪い、有機物の腐敗を促すバクテリアの生存条件を奪うことになった。四方に枝分かれした排水施設が都市内に施された一七世紀と一八世紀の

境目の時代まで、地表の水はその当時の地表から地中に浸み込んでいかなかったので、街路その他の通路には絶えず舗装を施すことが必要だった。このような排水施設は一六～一七世紀の地層と、さらに部分的には一五世紀後半までの地層とを乾燥させ、そのためにこれらの地層は完全に有機物の遺物を消失させてしまった。

地層のこのような特殊性はきわめて重要な結果をもたらした。ノヴゴロドでは、以前の木製舗装が古くなって使えなくなったときではなく、それよりずっと早くに街路の舗装が新しくされた。新設の街路の両側に存在する文化層が成長して、まだ充分に使える丈夫な舗装の表面よりも上まで堆積してしまった段階で施されたからである。こうしたことは舗装を施してからおよそ一五―二〇年ぐらいで規則的に繰り返された。新しい舗装丸太は前の舗装丸太の上に重ねられ、前の舗装がいわば街路の土台の一部として機能した。このようなメカニズムは休みなく作動した。都市内のさまざまな箇所の発掘が明らかにしたところによれば、一〇世紀半ば（この時期に最初の街路に舗装が始まった）から一五世紀の中葉までの五〇〇年にわたって、舗装街路の上にはおよそ三〇層の舗装丸太が重ねられていったのであり、それらの各層は年輪法によって正確に年代確定されている。

このような舗装の年代確定が、今度は、白樺文書を含めた豊富な複合遺物群を詳細に年代づけする可能性をつくり出した。なぜなら、これらの遺物群は、重なっている舗装の各層の層位学的な年代範囲、つまり一五～二五年の範囲の正確さで信頼のおける年代を得ることになったからである。容易に気が付くことであるが、これだけの正確さは、古文書学的年代確定の可能性を明らかに凌駕しており、また古文書学自体にとってもより信頼のおける基準が生み出されたことを意味している。

ノヴゴロド文化層には上述のようなメリットがあるために、白樺文書が存在していた時期に関する一般的な判断、とりわけ白樺文書が消滅していった時期に関してはより明確に判断を下すことが可能になる。今日の時点で最も古い白樺文書は一一世紀前半の地層から出土したものであるが、しかし、すでに最も初期の文化層からも白樺文書に使う筆具が見つかっているし（最も古いものは九五三～九七二年の地層）、さらに、これら初期の地層からはキリル文字の彫り込みのある木製の遺物類が見つかっていることにも注意を向けておこう。それゆえ、キリル文字は一〇世紀末にノヴゴロド住民がキリスト教化した結果出現したのではなく、少なくとも異教時代の末にはこの地に存在していたと主張していいことになる。[20] ただし、この初期の時代の読み書き能力の規模を過大に評価することはできない。一九九四年の発掘シーズンには一〇世紀から一一世紀始めの地層で一〇〇〇㎡以上の面積が掘られたが、一枚の白樺文書も出土しなかったのであり、この一事がそのことを充分に示している。

白樺文書が大量に利用されていた期間の終りの時期に関して言えば、それは全体として一五世紀の後半だったと断言することができる。むろん、それより後の時代の地層に白樺文書が含まれていないということではない。一六～一七世紀の地層は通気が良くなったために、この時代の地層に入った白樺樹皮は残り得なかったのである。しかし一五世紀後半以後、白樺文書が大量的な遺物でなくなったことを示す間接的な証拠がある。それは、一一世紀から一五世紀半ばまでのあいだ豊富に見られたノヴゴロド諸教会の壁のグラフィット[21]が、この時期に消滅してしまうことである。漆喰の壁に悪戯書きをした筆具は、白樺樹皮に文章を書くのに使われたのと同じスティロスであったから、グラフィットの消滅はそのままスティロスが使われなくなったことを意味している。

その原因は、一五世紀にロシアでは急速に安い紙が普及し、同時に紙に書くための筆具である鵞ペンとインクが全般的に広まったことにある。[22]インクで書かれた二枚だけの白樺文書が、実は両方とも一五世紀の半ばから後半にかけてのものであるのは示唆的である。

ノヴゴロドで発見された白樺文書は、その出土した地層の年代でまとめてみると以下のような枚数分布になる。

XI世紀……二一
XII世紀……二二五
XIII世紀……一六四
XIV世紀……二六一
XV世紀……八八

但し一五世紀後半の地層はすでに有機物を保存していないので、最後の数字は一五世紀の前半の地層が含んでいた数値を示している。一三世紀の文書数がいくらか落ちるのは、タタール＝モンゴル来襲期の荒廃の結果もたらされたロシアの全般的な危機の状態を反映している。

特に指摘しておきたいのは、白樺文書が発見されるまで、モンゴル時代以前に羊皮紙に書かれた文書のオリジナルを、全部でたったの三通しかわれわれは手にしていなかったことであり（一通は一二世紀、二通が一三世紀前半のものである）[23]、それ以前のものにいたっては一通もなかったという点である。このような状況そのものから考えれば、白樺文書史料の発見が歴史学や言語学にとって非常に貴重な発見となったのはしごく当然のことだった。

白樺文書と古文書学の諸問題

ノヴゴロドで発見された白樺文書の最も古いものの一つ（No五九一、一一世紀前半）に書かれているのはキリル文字のアルファベットであるが、全部の文字はそろっていない。このアルファベット中には四三文字はなく、三二文字しか含まれていない。Щ Ы Ь Ю Ꙗ

Ε ϒφ ϛ ψ θ ω が欠けているのである。[24] これらの文字が欠けている理由を、書くスペースが足りなかったのだと説明するわけにはいかない。アルファベットは大きな白樺樹皮の中央部分を埋めているだけだからである。

ところで、一二世紀の地層から出土した文書No四六〇にもまったく同じ特徴をもったアルファベットが書かれている。このことは文字の欠如が偶然でなかったことを示しており、これら二つの文書はキリル文字形成の初期の段階を反映しているとの主張を裏付ける。つまり、この時代には、書物の文章語ではすでに一一世紀中葉によく知られていたような最終的な構成をとった［四三文字の―訳者］アルファベットがまだ完成していないのである。一三世紀の白樺文書に書かれたアルファベット（No一九九・二〇一・二〇五）、および一四世紀前半の蠟板の上に刻まれたアルファベット[25]は完成度は進んでいるが、しかし依然として完全ではない。私はこのような簡便な構成のアルファベットを、「伝統的アルファベット」と呼んでおくことにしたい。少しく補充されていたとはいえ、この不完全なアルファベットは一四世紀においてさえ初級教育の土台として機能していたからである。

キエフのソフィア聖堂の一一世紀の壁のグラフィットにやはり不完全なアルファベットが発見されたが、これは文字の構成は違っていて、出来る限りギリシャ語のアルファベットに近づけようとしたものだった。この発見が示しているのは、ルーシで使われていたアルファベットには変異性があったということである。従って、キリル文字はギリシャ語のアルファベットを基にしながら徐々に形成されたのであって、一時期に人工的に創り出されたという発生史をもつものではない、という意見には支持されるべき充分な根拠があるといえよう。換言すると、聖キリルが創作したのはキリル文字ではなくグラゴール文字だという説には充分な根拠があるということである。[26]

白樺に字を書くという方法は、ロシア文字の古文書学的特質の形成にも、また古代ロシア文献の文体的特質の成り立ちにも少なからぬ役割を果たした、と考えねばならない。白樺樹皮に文字を書くには、物理的にかなりの力が必要だし、白樺樹皮が紙の役をするという要因からは文字の線の単純さが要求される。白樺樹皮の書体と草書体（スコロピシ）とは、相互に排除しあう対極的な関係にある。ところで、ルーシに草書体が出現するのはかなり遅く、やっと一五世紀の中頃からよく見られるようになった。白樺の記録の消滅と草書体の普及という、この二つの重要な現象の時期が一致している点に注目せざるを得ない。もし草書体の普及が紙と鵞ペンの大量導入に関係しているとするならば、白樺の記録が盛んに行なわれていたということが、一一～一四世紀の書物に楷書体（ウスタフ）や行書体（ポルウスタフ）を残す主要な原因になったことは疑い得ないと

ころである。白樺文書のコレクションのなかに相当数の文字練習の文書があるということも、白樺に文字を書くことが書体の形成に直接結び付いていたことを重ねて証明している。

書体に及ぼした影響ほどではないが、白樺樹皮の記録はまた文体の形成にも作用を及ぼした。白樺樹皮の記録は、簡潔に書くことを余儀なくされていたから、思考を叙述する仕方そのものにも不可避的な特質を刻印することになったのであり、自分の言いたい全内容を最大限に言葉を節約して表現するような叙述方法を生んだ。

一例として、一三世紀中葉の文書No六三六を挙げることができよう。この文書はノヴゴロド当局に対する報告書で、次のような内容である。買い戻されて釈放された一人の捕虜がポロツク市から国境地点に到達した。その人物の伝えるところによれば、彼が出発してきた場所には、ノヴゴロドに敵対するリトワの大軍が集結しているとのことである。そのため、当地国境要塞の守備隊には要塞が包囲された場合の食料備蓄の補充が必要であり、必要量の小麦を送付されたい、というものである。ところが、この充分に具体的な内容で満たされた報告はたった一三語で叙述されており、しかもそのうちの四語は前置詞と接続詞である。古代ロシアにおける文体論の諸問題は、白樺文書テキストの文体との関連で研究すると非常に面白いと思われる。

いま検討している側面は、中央ヨーロッパや西ヨーロッパの考古学的発掘で、白樺文書を捜したり発見したりする可能性があるかどうか、を判断する上でもおそらく重要である。白樺樹皮に文字を書く道具は、ポーランド諸都市でも見つかっている。中世スカンジナビアでも白樺樹皮を筆記用の材料に用いた、という情報は存在する。インクで書かれたものであれば、一五～一六世紀のスウェーデン語、及びドイツ語の白樺文書の存在も知られている。しかし一六世紀のオラウス・マグヌス[27]が書いている次のような言葉から判断するなら、スウェーデンに樹皮に刻み付けて書かれた文書が存在したことは疑う余地がない。「白樺樹皮が好んで人々に使われてきたのは、文書が雨や雪で傷んだり、駄目になったりしないからである」。このように、西欧の白樺文書を求めて探索することには展望がある。しかしまた西欧における白樺の記録は、全体としてロシアより早くに消滅したと考えなくてはならない。大部分の西欧諸国ではすでに一三世紀に、紙も、草書体的な書体も出現しているからである。

そうはいうものの、西欧人が書いたもので且つ刻み込み型の白樺文書が初めて発見されたのはほかならぬノヴゴロドでのことである。そのうちの一通（No四八八）は、ゴート商館つまりハンザ商館領域の一四世紀と一五世紀の境界の地層から出土した[28]。文書はドイツ人がラテン語で書いたもので、旧約聖書の詩篇第九四節ダヴィデ賛歌の最初の数行のテキストである。この文書が典型的な文書でないことは、一方ではゴチック斜体、つまり紙の上で形成された書体で書

かれていることによく現われているし、また他方では、白樺樹皮が当時まだ主要な記録材料として機能していた場所で発見されたことにも現われている。

もう一通のドイツ語文書は、一九九三年の発掘シーズンに一つの大きな話題となった。この文書は一一世紀二〇年代の地層から発見され、今現在のところ、ノヴゴロドの白樺文書コレクションのうちの最古の文書である。テキストは極めて短く、まだ試論的な読み方ではあるが、ドイツ語で（P)il getal im kie（槍よ、彼を突くな）と書いているように思える。[29]

考古学的遺物複合体の一部としての白樺文書

白樺文書の最初の発見者であるアルツィホフスキー教授は一九五一年にこう書いた。「私は敢えてこう考えたいのだが、将来これらの文書はノヴゴロド史にとって、ちょうどヘレニズム時代やローマ時代のエジプト史においてパピルス文書が果たしたような史料となることであろう」。こうした期待は、確かにそれ以後の年月に見事に実証された。しかしながら、パピルスと白樺文書の性格をできるかぎり近似的に考え、パピルス学になぞらえて「白樺文書学」という新しい学問の成立さえも宣告した多くの研究者[30]が望んだような方向で、この期待が実現してゆく必然性はなかった。実際、たしかにパピルスと白樺樹皮には多くの共通性があった。パピルスも白樺樹皮も、伝統的な記録文書とは著しく異なる新しいカテゴリーの史料である。書かれている内容と書かれた動機が無限に多様であること、日常生活的な内容をもっていること、一過性の目下の緊急事が記録されていること、文書が作られる原因がきわめて具体的であること、などの点でも両者は似ている。

しかしそれと同時に、白樺文書には、その研究を独立の学問とし切り離すことを許さない貴重な性格がある。大部分のパピルス文書は、それを生み出した最初の日常的複合遺物群から切り離されて今日に伝えられており、第一義的には記録史料として存在しているのだが、白樺文書の場合は、記録史料としてのすべての性格を備えながらも、考古学的遺物群との関連を失わず、むしろその重要な一部分として留まっている。

白樺文書は、ある短い年月のあいだ使われていたところの、非常に具体性をおびた屋敷の領域を発掘する過程で発見される。つまり白樺文書は、必ず、それらの文書と同時代であるのみならず、文書が一体となって結合している生活上の複合遺物群の非常に幅広い遺物と一緒に発掘されるのである。むろん白樺文書をこれらの複合遺物群から切り離して研究し、その内容の細部だけを分析することは可能であるが、そうした研究方法は白樺文書がもつ情報源としての可能性を著しく切り縮めることになる。記録史料としての質と、物

質史料としての質を結合している白樺文書は、その分析に際しては、不可避的に二つの質の間の双方向の結び付きを生み出すのである。白樺文書研究のこの側面について見ていくことにしよう。

考古学者は、白樺文書のことを知らなかった時代には、当然のことだが、彼らが発掘している屋敷地が誰のものだったかを確定する手だてはなかった。うまくいった場合でも、「商人の家」とか「富裕な都市民の屋敷」等々といった定義を使うのがせいぜいであった。ところが今や、「市長ユーリー・オンツィフォロヴィチの屋敷」「司祭オリセイの家」「貴族ルカの屋敷地内の宝石細工師の工房」[31]といった定義を採用することが可能になった。考古学的な複合遺物群が歴史に個体化、人格化の様相をおびさせるのである。しかしまた逆に、白樺文書がどのような複合遺物群に属し、それらと一体となっているかということも、文書内容の解釈それ自体にとってきわめて重要だったのである。もし白樺文書に他の史料で知られているような人名が宛名なり差出人なりの形で出ているなら、この文書はそれだけでも解釈はできる。しかしもっとも一般的なのは文書は断片だけしか残っておらず、考察に必要な名前が失われているようなケースである。こんな場合、この文書がどのような人のものであるのかは、屋敷地の複合遺物群全体の分析によってのみ確かめられることなのである。

白樺文書と複合遺物群との結び付きは、年代的に同一の地層水準の範囲内だけで存在するのではない。幾世代にもわたって同一家族に所属しているある一つの屋敷地の範囲内で、白樺文書は家族の系統譜に沿った長期にわたる相関関係の体系をつくっており、また一連の場合にはこの体系に所属することを確認されるだけであるが、それでも白樺文書テキストだけの分析からよりも遥かに広範な結論が得られるのである。幾つかの例を見てみよう。

一九五一～六二年の研究発掘[32]の過程で幾つかの大きな屋敷地が発見されたが、その一つひとつは一二〇〇㎡から一八〇〇㎡の面積があった。これらの屋敷地が富裕な所有者のものだったことは、その広さをみただけでも明らかだった。ミシニッチイ一族の貴族たちに宛てた一四世紀から一五世紀前半の白樺文書群がここから発見され、発掘地域にはこの貴族の屋敷地があったことが明らかになった。[33]ミシニッチイ一族の代表者たちは代々にわたって市長職[34]、つまりその広さからすれば当時の西欧のいかなる王国よりも大きかった国家の長の地位を占めていた。ところが、すべての屋敷地は事実上同じ程度の大きさで、建物も同じ様な組み合わせをもち、生活道具の構成も互いによく似ているなど、最も富裕で有力な家族ととりたてて何も目だったところのない隣の一族とが均質であるという、中世的条件下では説明のつかない均一性に関する疑問を生むことになった。

しかし、白樺文書の空間・地理学的な分布研究が明らかにしたところによれば、この一族は近隣の家族と違って、一つだけの屋敷地

ではなく数個の屋敷地を所有していたのである。五〇年代に発掘された屋敷地群のうち、この一族の所有下にあったものは三つだった。[35] しかしこの貴族一門のメンバーが行った近隣地区の教会建設に関する年代記の記録を考察の対象に入れて考えてみると、発掘されたのは一族の都市内所有地のごく周辺部の一部分にすぎず、全体としては約一〇から一五ほどの屋敷地を含む、ひとかたまりの一大所有地を形成していたものとの推定に達した。そして予想された大所有地塊の範囲内の、しかし以前にネレフスキー発掘で研究された屋敷地からはかなり離れた場所で行われた一九六九年の新発掘によって、この推定の正しさが実証されたのである。新しい発掘でもまた、貴族ミシニッチイ一族に関係する白樺文書その他の資料が発見されたからである。

もう一つの例をあげよう。一九七三年に、現在も続いている大きな面積の発掘がノヴゴロド・クレムリンのすぐ近くで始まった。ここで発掘された屋敷地の一つが、一二世紀から一三世紀の境目の時代に、司祭オリセイ・グレチンという人物のものだったことがかなりはっきりと確認された。この屋敷地から出土した数多い白樺文書のなかに混じって、正教の教会法に即した人名、つまり俗名ではなく教会暦にあげられているような形の洗礼名だけを列挙している約二〇通の文書群が発見された。最初、この文書は法要のためのメモだと解釈された。つまり生きている人間であればその人物の健康を、反対に死んだ人間であればその永遠の至福を願って教会で祈祷すべき人物名のメモだと考えられたのである。だが奇妙なことに、そうしたメモのなかの人名語尾に格の不一致が認められる場合があった。例えば、文書No五〇六の場合、「ピョートル（主格 Петр）-ヨアンの（生格 Иоанна）、マリアンナ（主格 Мариамна）、アンナ（主格 Анна）-ゲオルギイの（生格 Георгия）、フョードル（主格 Федор）-プロコピイの（生格 Прокопия）……」等々となっている。一方、同じ屋敷地の同じ地層から、ここにイコン絵師の工房があったことを示す沢山の証拠が発見され、後にはこの屋敷地の所有者たる司祭オリセイ・グレチンに宛てた白樺の手紙も見つかったが、その手紙は、司祭ではなく絵師としての彼に宛てたものだった。その手紙の一つ（文書No五四九）にはこうある。「拝啓、司祭よりグレチンへ。私のとこのイコノスタス用に、六翼の天使[36]二人を二枚のイコンに描いて下さい。貴方に私の接吻を。報酬は神がお決めになることですが、いずれご相談を」。明らかになったことは、謎の人名表がイコン制作の注文記録だったということである。例えば、上に引用した文書No五〇六でいえば、ピョートルは聖ヨアンの姿を描いたイコン、マリアンナとアンナは聖ゲオルギイのイコン、フョードルは聖プロコピイのイコンを注文したのである。[38]

画家グレチンについては、クレムリンの中に建立されたばかりの教会にフレスコ画を描いた人物として年代記の一一九六年の項に言

及されており、彼はイコン絵師としての技だけでなくフレスコ画の技術も身につけていたことが判る。彼の綴字法の特徴を細かに研究した結果、それと同じ特徴はロシア中世絵画の最もすばらしいアンサンブルで、一一九九年に描かれたスパス＝ネレジッツァ教会[39]の複合フレスコ画の銘のなかにもあることが発見された。このアンサンブルの最も重要な部分は同一人の手法で描かれており（この仕事には一連の絵師たちのアルテリが参加している）、そのことからこのフレスコ画の中心となった画家の名もまたオリセイ・グレチンであることが明らかになったのである。

この結論を裏付ける証拠がグレチンの屋敷地で発見された。ここで見つかった一一世紀の鉛印章[40]には、ハルコプラティアの聖母[41]と見事に仕上げられた花飾りのある十字架との珍しい取り合わせの図柄が認められる。スパス＝ネレジッツァのフレスコにある同じ構成の図柄はこの印章から出ていることは間違いなく、オリセイ・グレチンはこれを手本として用いたものと考えられる。この際立った発見のもつ意義は明白である。西欧の場合と違って、ロシア中世絵画の傑作にはかならずといっていいほど銘がない。最近のことだが、優れたロシア人画家で中世絵画の研究者でもあるイーゴリ・グラバーリ[42]はこう書いている。「最古の時代の作品はほとんど常に無銘であり、また一一世紀、一二世紀、あるいは一三世紀のロシアの教会のフレスコ画を描いた無名の画家たちの名が何時か明らかになるといった可能性もまったくない」。白樺文書はこのような主張を覆し、グレチンの例で証明されたような成功例を今後も捜し求めることへの見通しと確信とを浸透させたのである。

最後にもう一つ例をあげよう。この例は、ある屋敷地の所有者を同定する問題が、長年にわたる発掘で得られたさまざまな文書の全体的な研究ができるようになったときに、初めて解決されたことを示す例である。一九八〇年に文書No五八六が見つかり、一九八五年にNo六三三が出土したが、両文書の内容は一二世紀前半の軍事行動に関係していて、その軍事遠征の指導者がイワン某であることが両方に言及されている。両方の文書が発見された後になってはじめて、このイワンが市長のイワンコ・パヴロヴィチ[43]のことだという推定が出された。両文書はノヴゴロドの同一地域で行われた別の発掘で発見されたのだが、諸史料によって確かめてみると、確かにこの地域には市長のイワンコが住んでいたことが判明した。イワンコ・パヴロヴィチは一一三四年に市長になり、一一三五年一月二五日にスズダリ人との戦闘で死んだ。この人物の名は年代記の物語で知られているだけでなく、ヴォルガ上流のステルシ湖畔に一一三三年に建てられた石の十字架の銘にも刻まれている。十字架の銘には、彼が行った灌漑工事について「一一三三年七月一四日、私イワンコ・パヴロヴィチはこの河を掘った」と記されているからである。

市長イワンコの同定に関する上記の推定は、さらに一九九二年の

新しい発見で確認されることになる。その一つである文書No七三六は少し変わっていて、一通の手紙ではなく、二人の人物の交信の手紙だった。文書の片方の面には、イワンがドリスチフ某に宛てて、パーヴェルに代って彼が貸し付けた元本とその利子分を取り立ててくれるよう委託した手紙で、「もし君がパーヴェルの利子を取ったら、プロコピイからも取らないといけない。これも既に取ってあるなら、ザヴィドの分も取ってくれ。もうこれも取ったのなら、こちらに来て知らせてくれ。今のところ私の方はまだすべての利子を引き渡してはいない」と書いている。この白樺樹皮の反対側の面はドリスチフからイワンへの返事で、「私はまだほんの小額の元本も取っていないし、彼はまだ見つかってもいない。私が取れたのはプロコピイの借金だけだ」となっている。一つの文の中にイワンと［彼の父である—訳者］パーヴェルが一緒に登場していること、ここでイワンはパーヴェルによる貸付金の利子について監督していること、文書は一二世紀一〇～三〇年代の地層から出土していて、年代的にイワンコ・パヴロヴィチの活躍していた時代と符号すること、発掘されている場所はすでに彼と関係がある場所ではないかと考え始められていたこと、こうした状況証拠は、No七三六のイワンとイワン・パヴロヴィチとを同一人物とする推定の正しさを裏付けるものであろう。

さらに、このことを最終的に確信させたのが、一一世紀末から一二世紀第I四半紀の地層から発見された文書No七四五である。この文書にはこうある。「ロストフにてパーヴェルより兄弟へ。もしキエフ女の船がすでにこちらに送られたなら、お前にもパーヴェルにも悪い評判がたたぬよう、彼女のことを公に伝えよ」。手紙の主パーヴェルは文の末尾に第三人称で呼ばれているので、パーヴェルが自分で書いたものではないと推定できる。われわれはここで、すでに旧知のパーヴェル、つまりイワンコの父にさらにもう一度出会うことになった。この手紙は、彼が公（この公はウジラジミル・モノマフの息子で一〇九五～一一一七年にノヴゴロド公だったムスチスラフ・ヴェリキイ[44]に違いない）と直接的な関係をもっている高い地位にあることを物語っており、手紙の内容自体がパーヴェルの人物にふさわしい。年代記の記事も彼がノヴゴロドの高い行政職にあったことを裏付けている。一一一六年に、パーヴェルはノヴゴロドから任命されてラドガ市長となり、この在職中にラドガ[45]に石の要塞を建設している。

白樺文書と読み書き能力

ノヴゴロドにおける読み書き能力の発達の程度いかんという問題は、白樺文書発見の事実それ自体の全般的評価と不可分であることは言うまでもない。なぜなら、白樺文書は中世ノヴゴロド社会の文

化水準に関する過去の理解を、決定的といえるほど完全に変えてしまったからである。それも重要なのは、白樺文書の数ではなく、白樺の書き物に関わっている人々の社会的階層の範囲にある。文書の内容の分析、その書き手と受け取り手の構成の分析結果が明白に物語っているのは、読み書き能力のあるノヴゴロド人の範囲が非常に広いという事実である。読み書き能力のある人々の中には、貴族（ボヤール）も、非貴族出身の大土地所有者も、商人も、さまざまな位階の聖職者も、手工業者や農民も入っているし、また男も女も含まれる。読み書き能力が女性の中に、特に非特権的身分の女性たちの間にも普及していた事実がこの社会の文化的発展の高さを示す有力な指標となっており、この点は特別な説明を要しないであろう。

白樺文書の書き手と受け取り手のうち、ある一定部分の読み書き能力に関しては、疑ってみることが充分可能でもあり、また必要でもある。ノヴゴロドには職業的な代書屋の制度があって、なにがしかの代償を取って読み書きのできない人々の手紙を読んだり書いたりしていたと推定することができる。とりわけ、同一の人物によって作成された何通かの文書を古文書［古文字―訳者］学的に分析した結果、それらが違った筆跡で書かれていること、つまり文書の作り手の、口述ないし依頼によって書かれていたことが明らかになった。またそれとは正反対のケースもある。No六六四とNo七一〇の筆跡は同一人物のものであるが、しかしその作り手の名は違っているのである。

しかし他方、白樺文書は、書き手が自分自身の手で書くのが一般的だったことを物語る充分に客観的な史料も存在している。それは何かというと、発掘研究されている地層から白樺樹皮に記録するための筆具が多量に発見される点である。その数はすでに百点を超えている。同時に出土する複合遺物群が多少とも大きな規模の発掘であれば、この筆具はほとんど必ずと言っていいほどその中に入っており、従ってノヴゴロドでは読み書き能力のある人々は相当数いたことを確信させるのである。しかしそれと同時に、このような遺物の数はそれなりに限られているのであるから、読み書き能力の発達程度の過大な評価に走ることはできない。実際、全ての住民に読み書き能力があったとはとてもいえない状況にあったことは明らかである。

この点に関連して非常に難しく、かつ重要な疑問が生じる。この比較的高い読み書き能力の水準は、ノヴゴロドにのみ固有な現象なのか、あるいはノヴゴロドでの発見はもっと広い全ロシア的な状況を反映しているのか、という疑問である。この問題を考えるのに、ノヴゴロドでは数百のオーダーで白樺文書が発見されるが、他の諸都市では数点でしかない、といった事情は余り本質的な意味をもたない。ノヴゴロドと他の都市では考古学的研究の規模そのものが比較を絶しているからである。しかしそれでも、ノヴゴロドは将来に

わたっても常に他の都市よりもより多くの白樺文書数、言い換えれば、より高い読み書き能力の水準を誇ることになるのではないかと私には思われるのである。

ノヴゴロドの固有な二つの特殊性がこのような考えを支えてくれる。第一は、ノヴゴロドの政治体制の独自性が、この都市の文化全般にわたる発展に明らかな役割を果たしたという点である。専制的な政治体制をもっていたロシアの大部分の地方と違って、ノヴゴロドは一四八七年のモスクワへの併呑に到るまで、幾世紀にもわたって共和政的政治体制のもとにあった。たとえその共和政が貴族（ボヤール）的な共和政で、巨大土地所有者たちの手に全権力が集中していたとはいえ、ヴェーチェ集会[46]を通じて公然と展開された政治生活の公開性は、社会のあらゆる部分に政治的のみならず文化的な主体性の覚醒と発達とを促したのである。

第二のノヴゴロド的特殊性もまた、これに劣らず重要である。中央ロシアおよび南部ロシアの諸公国には多くの小都市が存在していたのに対して、ノヴゴロド地方には殆どそういう都市が無かった。ノヴゴロド市がただ一つ、広大な領土の真中に存在した。専ら農村的性格を帯びたノヴゴロドの周辺地域の単調さを破っていたのは、ルサ[47]およびラドガという二つの都市だけだった。

私の理解するところによれば、この特殊性は、ノヴゴロド国家の政治的機関に固有な諸条件に直接関わるものだった。専制的な公の権力が支配する領域内に住んでいるボヤールにとって、自己の独立性を確立する主要な手段は、地方分散的傾向を実現することだった。南部ルーシにおいては、公国のボヤールの独立性は公から遠く離れているほど大きくなり、インムニテート特権をもったボヤールの所有する小都市においてその程度は最高に達した。そこではボヤール自身が、彼に従属する住民に対してちょうど君主のような存在になっていた。

ノヴゴロド貴族の自己確立の手段はまったく対照的であった。彼らの政治的な力は共和政的行政への参加の程度に依存し、ノヴゴロド権力への参加如何に懸かっていた。しかもその権力というのは、独立的な都市五区から比例代表制的に編成される連邦制を基盤に組織されていた[48]。中央逃避的な志向に固執する貴族は誰であれ、この社会に形成され発展した政治的相互関係から切り離された隠遁者に変わってしまうのである。それゆえ、ノヴゴロド地方における貴族は求心的であった。膨大なラティフンディウムを所有しながらも、彼らは都市で生活した。およそノヴゴロド市の外にあったボヤール所有の城塞小都市で、知られている限りのものは、どれも文化層の堆積を完全に欠いている。このことは、これらの小城塞都市が土地所有者の恒常的な居住地ではなく、所領地を巡回する際の一時的滞在場所として利用されただけだったことを意味している。このような求心的傾向は、全ボヤール身分による権力参加にやがて寡頭支配

の体制を生み出した。その結果、一五世紀の初頭には、参議会[49]を構成したのはノヴゴロドの全ボヤール家族を代表する数十人にすぎない状態になった。

しかしそうであるならば、ノヴゴロドの最も重要な特質は、一五世紀の土地台帳[50]から確認できるように、全ての大土地所有者が都市そのものに集中していたということ、従ってまた彼ら土地所有者たちにとって、都市から数十キロときには数百キロも離れ、しかもノヴゴロド領のさまざまな地方に分散して存在していた自分の所領群との間を結ぶ、何らかの有効な連絡手段を見つけ出す必要があったことである。そのような連絡が、まさに識字能力を促した可能性があるのである。

それゆえ白樺文書コレクションの中に、ノヴゴロドで書かれ、ノヴゴロド市内の誰かに送られたという手紙が殆ど見当たらないのは偶然ではない。どのような関係であれ、市民同士の間でなら、手紙のやり取りなどなしに事を済ますことが可能だった。現在われわれが知っている手紙（覚え書き的な記録ではない文字通りの手紙）は、長い空間的な距離を克服する手段として機能していたのである。そのなかには他の都市で書かれたものも多いが（スモレンスク、ヤロスラヴリ、ロストフなどから受け取った手紙も入っている）、圧倒的多数はノヴゴロド領内の農村地帯から送られてきたものである。それは、農村の所領管理人（スタロスタ）による都市在住の主人に対する報告や通知だったり、農民がスタロスタの行動を告発する手紙だったりする。ノヴゴロド市内で書かれたもので、農村住民に宛てた経営上の指示を内容とする手紙もかなりの数存在している（こういう手紙は多分、主人の命令を指示通りに遂行したことを報告する手紙と一緒に、指示の受け手が送り返してきたものであろう）。他のロシア諸都市には、土地所有者とその所領とがこれほど極端に離れている例がなかったから、ノヴゴロド以外の都市では相互通信の量も、またそれと関連している読み書き能力の水準も、ノヴゴロドほどの高さには達しなかったのだと考えるべきであろう。

ノヴゴロド白樺文書のコレクションのなかには、書き方や計算の練習書きが少なからずあるが、最もよく知られているのが一三世紀の地層から発見された少年オンフィムの一連の手習い文書である。[51]しかし、読み書き学習がごく日常的な事柄であったことをきわめて明瞭に示している例としては、一四世紀末の白樺文書No六八七をあげることができよう。夫から妻に宛てたこの手紙は、一連の家事に関する指示を内容としており、油を買う必要があるとか、子供たちの衣服を手に入れなければならないとか、馬の面倒をみるべし、といった些事を妻に指示しているのである。この手紙では、何か特別の事柄としてではなく、このようなまったく日常的な家事の指示の中に混ざって、子供らに読み書きを教える仕事も妻に言いつけられているのである。

白樺文書の歴史的意義

しかし白樺文書の中世史新史料としての価値は主としてどこにあるか、という問題を立てるなら、第一に挙げなくてはならないのは、その潜在的意義、つまり中世史の史料となるべき幅広い可能性という点であろう。この意義の内実は今日もなお解明されていない。文書のコレクションが絶えず補充され増加し続けるであろうから、将来にわたっても、完全に解明されることはないだろう。

白樺文書のこの価値を別の言い方で表現するならば、この新資料がもつ伝統的な記録史料との対照性と呼ぶこともできる。伝統的な史料にはどのジャンルにも一面的な傾向性がある。そのことは、伝統的な記録史料のうち最も量の大きな年代記を例にとってみるとよくわかる。年代記の記述は大いに計画的であるとともに、非日常的な事柄に強い関心をよせる。年代記作者は、何であれ彼の想像力を刺激する事実や状況を記録する傾向がある。好んで語られるのは、軍事行動と和平条約の締結、箒星の出現や日蝕月蝕、公位や主教座の交代、新教会の建設、旱魃、洪水、疫病などである。しかし、遠くからなら見分けられる緩慢な歴史の進行は彼の視界から抜け落ちている。彼は、自分自身や自分の同時代人だけでなく、父や祖父などにもよく知られている事物についての話は無視する。彼の時代にはすでに成立し、伝統となっている事柄については記述しないのである。そうした事柄について言いたいことを同時代人に分からせるには、「旧習と慣習」つまり「古来からの決まり通りに」という言葉を使うだけで充分だったのである。

伝統的な記録史料のその他のジャンルは、こうした一面的性格がさらに一層顕著である。証書類[52]においては、現象のダイナミズムでさえもが決まった型にはまった既成の様式に従って書かれ、新しい事柄もすでに新しくなくなった頃にそれを記録するのである。聖者伝の物語は、通常、現代の歴史家にとって一番肝要な主人公の日常生活の部分が決まりきった型にはまった叙述になっている。

このような制約はすべからく白樺文書の場合には存在しない。白樺文書が生活のなかに生まれる動機はたえず変化し、また常に直接的なものだからである。白樺文書の一枚一枚は、ちょうど壊れた鏡のほんの小さなかけらのようなものであるが、しかし同時代の現実の小さなかけらを永遠に写し出している。それゆえ、これらのかけらを集めて往時の生活の全体像を復元すること、他の方法では復元不可能な全体像の再現に努めることが歴史家の新たな課題になったのである。

我々はただ未来の研究者たちを羨むばかりである。なぜなら、彼らには数百枚のオーダーではなく、数千枚のオーダーの白樺文書を扱うことができるであろうし、今日のわれわれには予想だにできな

いような、さまざまな問題への新たな解答を次々に探し当てることができるようになるはずだからである。

しかし、この将来の仕事の、一つの側面だけは現在でもはっきりと予見することができる。白樺文書が発見される以前には、ロシアの中世世界はいささか無味乾燥なものだった。ロシア中世世界を占めていたのは公、主教、市長、千人長および、それと対峙する物質的財貨の生産者たる名もなき大衆であったわけだが、歴史家は、社会を動かし進歩させてきた大衆のたゆみなき努力を、いわば「平均統計的」に評価してきたにすぎない。だが現在では、言ってみれば永遠の彼方に忘れ去られた人々の名が、毎年毎年あらたに見つけ出されている。歴史は、これらの人々の名前ばかりか、彼らのさまざまな考えや声によって満たされていくであろう。我々は、彼らからの手紙の新たな受信者として、数十年の後にはこの上なく多くのさまざまな個性をもった人々を知ることになろう。そして中世の歴史もやがて、現在のところはまだ近代史にしかみられない、生き生きとした具体性をおびた歴史になるであろう。

白樺文書と北西ロシアのスラヴ人定住問題

白樺文書を研究する過程で、東スラヴ人の一体性の形成に関する非常に重要な資料が手に入った。全スラヴ人は原初的には一体であり、その起源において共通の原スラヴ的基盤に遡るという点に疑問はない。しかし、紀元一千年紀の後半の五〇〇年を通じて、スラヴ人はヨーロッパへの分散というダイナミックな時代を経験し、その過程でそれぞれのスラヴ人グループは互いに違った自然環境に出会い、他の民族グループとの複雑な接触を経験し、互いに混交したりまた分離したりしながら、時間の経過とともに地方的な特徴を形成していった。従って最も重要なのは、九～一〇世紀、つまり古代国家形成の時期に東欧のスラヴ人たちがおかれていた状況に関する判断である。

何十年か前に、東スラヴ人には完全な一体性が存在する、という現在もなお支配的な理解が歴史学と言語学のなかに形成された。この説によると、東欧におけるスラヴ人の居住地の中心はドニエプル中流域で、ここから四方に拡散していったスラヴ人たちが年代記の世界に記されているあらゆる領土をそれぞれに獲得したのであり、そしてその最北の辺境にはキエフ地方から出たある者たちが小さな要塞を建設して好戦的な北方の隣人たちを防いだというのである。そしてこのように遠く離れていたことが、言ってみればノヴゴロド人の野心を大きくし、後には著しい独立性を獲得するほど経済的にも政治的にも強大になることができたのである。このような考えの合い言葉になったのが、オレークがキエフに向かって言った言葉「ここをしてルーシの母なる都市とせよ」であり、これはキエフが

すべての他の諸都市に対する絶対的上位を示す言葉として理解された。しかし実際には、「母なる都市」という表現は首都を現わすギリシャ語「メトロポリス」の翻訳借用語にすぎないのである。ノヴゴロドからキエフにやってきたオレークは、キエフを自分の新しい国家の首都にする意図を宣言したということなのである。

上述の説に対応して、その他の社会的変化の過程に関する見解も作り出された。もし分散化が一つの中心から生じたのであれば、言語も始めは完全に同一だったのであり、東欧のスラヴ人グループに固有なさまざまな方言は、一三～一四世紀の経済的・政治的な分立化時代になってようやく出現したものである、と考えられた。すべての東スラヴ諸族の文化的特質がドニエプル沿岸の南部地方で形成された文化に依存しているのであれば、彼らの言語文化もまた地方的特徴をもっていなかったことを意味する。

上に述べた見解は、何らかの先行研究の結果ではなかったということを強調しておかねばならない。それはむしろ方法であり、諸事実を意味づけする前提であった。科学にとって事実が不足していたことは明らかである。それゆえ、この見地を出発点にして東スラヴ人の生活の一般的な姿を再現しようとする研究者たちは、キエフの資料にノヴゴロドの資料を加え、ノヴゴロドの資料にスズダリの資料を付け加えるといった具合であった。またロシア人の資料が不足していれば、全てのスラヴ人はみな同じ祖先を持つのだからというわけで、好みにより、安易にポーランド、チェコ、セルボ=クロアートなどの資料が利用され、かくて自分らの文化的同一性を誇示することだけが義務となった。

白樺文書の発見は、このような見解と方法の正当性に疑問をもたせることになった。どんなことであれ、大きな全体の流れについての正しい判断を得るには、まずその細部がどのような地域的、個性的な意味をもっているか、そしてどんな共通の特徴があるのかを解明しなくてはならない。白樺文書という新しい史料が入手された結果、以前から所与のものとして与えられていた観念からではなく、量的に増大した諸事実そのものの分析から研究を進めることが可能になったのである。

白樺文書が発見されて、まだそのセンセーションがおさまらない初期の時代には、多くの言語学者はこれに関心を示したが、またある種の当惑を経験していた。最も古い時代の白樺文書の多くには、ロシア語史ではお馴染みの既成のシェーマにはどうしても納まらない言語的特質が観察されたからである。こうした当惑を克服するのにも二つの方法があった。ある研究者たちは、白樺文書を書いた者たちには読み書き能力が充分でなかったのだと考えようとした。別の言語学者らは、考古学者が遺物に与える年代づけが不正確なのではないかと疑った。例えば、考古学的に一二世紀と年代確定された文書に、前述した言語学上のシェーマからみて一三世紀末以降に発

生すると考えられる特質が見出されるとすると、考古学的年代確定は明白であるにもかかわらず、簡単にこの文書の年代づけの変更が行われたりした。かくして白樺文書は、言語学的には何一つ新しいものを提供しないことになり、言語学者らの関心も薄れてしまうという結果になった。

最も古い時代の白樺文書とロシア語の発展に関する上記の既成のシェーマとの食い違いが数多く積み重ねられた結果、ロシアの優れた言語学者で、考古学的な年代の信頼性を確信していたアンドレイ・ザリズニャーク[53]は、ノヴゴロドその他のロシア都市で発見された白樺文書の総体を全体的に分析し直す決心をした。その分析の結果は、これまで慣れ親しんできた概念の否定を余儀なくさせるものだった。明らかになったことは、まさに最も古い時代、つまり一一～一二世紀にも、非常にはっきりした形で固有の古代ノヴゴロド的方言が存在していたということであり、その方言は二〇以上もの指標において東スラヴ人の南部諸グループ方言と明確に違っていたという事実である。しかも、それらの指標の相当部分は、バルト海南岸に住んでいるスラヴ人（とりわけ北部ポーランド人）の言語との共通性が見出される。

しかしながら、この古代ノヴゴロド方言で最も目につくのは、現在使われている言語および中世のテキストでしか知られていないような言語を含めて、スラヴ諸語のなかには類似するものが見当たらないような指標が存在しているという点である。問題は「後口蓋子音の第二口蓋化」といわれる現象である（これはある一定のケースではKがЦに、Гが3に移行する際に現われるもので、例えば、本来のКельйの代わりにЦельй、в Боге の代わりにв Бозе、звездаの代わりにзвездаとなる等々のことである）。すべてのスラヴ言語はこの過程［後口蓋子音の第二口蓋化―訳者］を経験したのに対し、古代ノヴゴロド方言（プスコフ地方も入る）だけはこの現象に無関係だったのである。この事実が意味するのは、この方言を持つスラヴ人グループは、北西部ロシアの土地に移動する過程において、他のスラヴ人から隔絶した条件下にあったということである。ドニエプル中流域に住んでいたスラヴ人は上記の過程を経験しており、従って彼らのもとには同じ特質は見られない。「第二口蓋化」の過程から孤立していた原ノヴゴロド的スラヴ人グループの、一時的な滞在の場所をヨーロッパの何処かに発見するのは、将来の考古学的探究の課題となろう。しかし、このグループがすでにロシア北西部にきたあと、ごく早い時期にバルト諸族の居住する厚い帯状地帯によって残余の全スラヴ人世界から切り離されていた、という可能性もないわけではない。いずれにせよ、前述した残余のスラヴ人にないこの特質が示しているのは、プスコフ・ノヴゴロド地方に入ってきたスラヴ人住民の、少なくともその基本的集団で「クリヴィチ族」と呼ばれている部分は、ドニエプル中流域から来たのではなくバルト海南岸地

方からやって来たということである。

プスコフ・ノヴゴロドの原初の住民が西方起源であることは、墳墓考古学や人類学の資料によっても確認できる。同じことは、ノヴゴロド人とポーランド人の村落名、キリスト教以前に起源をもつ個人名を比較しても感じ取れる。重さの単位や貨幣制度の歴史の研究もまた、古代ルーシの中には、相異なる対外交易の方向をもった二つの地域があったことを示している。示唆的なのは、南部ルーシの貨幣＝重量体系はビザンツのリトラへの傾向性を示しているのに、北部ルーシでは西欧のマルクへの傾向性をもっている点である。(54)

換言すれば、われわれは次のように主張できるようになったのである。古代ルーシは二つの中心部分に相異なる伝統を持っていたのであり、そしてこのことが、結局はルーシに二つの形態の中世国家の形成を促し、南部ルーシには専制的な権力形態を固有のものとする公国制が生まれ、ノヴゴロドとプスコフにはヴェーチェ体制が発展して公がボヤールの権力、つまり氏族＝種族的な貴族の権力に対して二次的な地位を占めることになったということである。

しかし当面、これらの傾向が強まって完成形態を取るまでには到らなかったのであり、相異なる二つの東スラヴ的伝統の間の、相互的な影響と充実化の過程がキエフを中心とする古代ルーシ国家の発生を導き、一一世紀から一二世紀の第Ⅰ四半期にかけてその最盛期を築くことになったということである。(55)

一九九三年発掘で話題を独占したのは…

一九九三年の発掘で、人々の話題を独占したのは予想外の出来事だった。それは以下のような次第である。当時は一一世紀の地層が発掘されていたのだが、一一世紀はルーシに読み書き能力が普及するごく初期の時代にあたっており、白樺文書の発見はとりたてて期待されてはいなかった。そのことは、以下の数字がおのずと物語っている。ノヴゴロドでこの時点までに発見されていた七五三枚の文書のうち、一一世紀から一二世紀始めまでの文書とされるのは二七枚だけである。一九七三年に始まり、現在も続いているトロイツキー発掘で出土した二〇一枚のうちでは、同じ一一世紀から一二世紀始めまでのものと同定された文書は一九九三年までに六枚だけ、しかもそのうちの最後の文書が発見されたのは一九八三年のことである。一一世紀の白樺文書は、そのあと一〇年間も考古学者の手には入らなかったのである。初期の白樺文書のテキストは金の勘定、債権の覚書、利子の計算といった、非常に無味乾燥で現実的な実務を内容としたものでしかないという見解が牢固としてできており、そのことが文書が発見されないことへのせめてもの慰めになっていた。

そうであるだけに、文書No七五二が一一世紀と一二世紀の間の地

層から発見されたとき、発掘参加者たちが味わった感情の衝撃は一層強烈なものとなった。この手紙を受け取った人物は、白樺樹皮を縦長の帯状の樹皮片（長さは約四六センチ）に引き裂いて捨てている。発見された二つの帯状片の中では第一行目の冒頭部分が欠落しており（しかしその意味は復元できる）、また真中の帯状片が失われている。文書に欠落部分はあるものの、このきわめて珍しい文書の内容を復元するのにさして支障にはならない。

一行目には、最初のフレーズの末尾部分が「……貴方に三度」と読める。フレーズの欠けている部分の長さから推して、この手紙には宛名書きの形式的な部分が欠けており、手紙の発信人の名も受領者の名も挙げられていないことは確かである。[56] 最初のフレーズは、そのあとに続く文脈から判断して復元するとすれば、「私は貴方に三度手紙を送った」とする以外にはない。面白いのは次のような事情である。地中で発見される白樺文書が断片でしかない例は非常に多く、それもしばしば、最初の行の冒頭が欠けている。あとで手紙を拾った者に、誰が誰に出した手紙であるか判らないようにするため、手紙の受領者は冒頭部分を引きちぎってから捨てたのである。新たに発見されたこの文書にも、宛名を書く形式的部分がなかったのだが、それはおそらく、受領者がいつもの習慣で、機械的に手紙の冒頭部分を破いたからであろう。

手紙はこう続いている。「今週、私のもとにいらっしゃらなかったけれど、貴方には何か私に恨みでもあるとおっしゃるの！　私の方は、貴方に自分の兄弟に対するように振る舞っておりましたのに！　私が手紙を送ったことで貴方は気を悪くなさったのかしら？　どうやら、貴方にはそれがお気に召さないのね。もしもお気に召しているなら、人目をさけてでもここにいらしているはずですもの……」

この弾けるような情熱は、非常に美しい筆致で几帳面に書かれた数行のなかに託されている。しかし神経症的な感情は、筆者の非難の意図を歪めてしまうような誤記を訂正する文（ある場合には訂正していない文）のなかにほとばしり出ている。このあと欠落部分が続き、そのあと、残された二つ目の帯状断片にはまず「……今はどこか他所の場所で……。私に返事を下さいまし……」「……私が貴方を拒んでいる……」（おそらく、〝私が貴方を拒んでいるなどとお考えにならないで〟と読める）といった語句の断片が読み取れる。そして最後に、手紙の末尾の部分は次ぎのように言う。「……たとえ私の無分別ゆえに貴方がお気を悪くされたのだとしても、貴方が私のことを御笑いになったりすれば、神様もお許しにならないし、私も貴方を許しませんことよ！」

この手紙を書いたのは、高い社会的身分の、また明らかに文語を知っている若い女性である。一一世紀の女性にも、自分に会いに来なかった愛人にこれほど垢抜けした恋文が書けたという事実にただ

驚くばかりである。

これから先にも、同じ様な衝撃的な経験は我々をも、また我々の次にやって来る研究者たちをも待ち受けていることであろう。ともかく、地中から引き出された白樺文書は一〇〇〇枚にも達しておらず、まだ何千通もの文書が地上の受け取り手をじっと待ち受けているはずだからである。

文献

А. В. Арциховский. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1951 г.). М., 1953.《A・B・アルツィホフスキー『ノヴゴロド白樺文書（一九五一年発掘）』（モスクワ　一九五三）［文書No一～一〇］》

А. В. Арциховский. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1952 г.). М., 1954.《A・B・アルツィホフスキー『ノヴゴロド白樺文書（一九五二年発掘）』（モスクワ　一九五四）［文書No一一～八三］》

А. В. Арциховский, В. И. Борковский. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1953–1954 гг.). М., 1958.《A・B・アルツィホフスキー、B・И・ボルコフスキー『ノヴゴロド白樺文書（一九五三～五四年発掘）』（モスクワ　一九五八）［文書No八四～一三六］》

А. В. Арциховский, В. И. Борковский. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1955 г.). М., 1958.《A・B・アルツィホフスキー、B・И・ボルコフスキー『ノヴゴロド白樺文書（一九五五年発掘）』（モスクワ　一九五八）［文書No一三七～一九四］》

А. В. Арциховский, В. И. Борковский. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1956–1957 гг.). М., 1963.《A・B・アルツィホフスキー、B・И・ボルコフスキー『ノヴゴロド白樺文書（一九五六～五七年発掘）』（モスクワ　一九六三）［文書No一九五～三一八］》

А. В. Арциховский. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1958–1961 гг.). М., 1963.《A・B・アルツィホフスキー『ノヴゴロド白樺文書（一九五八～六一年発掘）』（モスクワ　一九六三）［文書No三一九～四〇五、スターラヤ・ルサ文書No一～一三］》

А. В. Арциховский, В. Л. Янин. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1962–1976 гг.). М., 1978.《A・B・アルツィホフスキー、B・Л・ヤニン『ノヴゴロド白樺文書（一九六二～七六年発掘）』（モスクワ　一九七八）［文書No四〇六～五三九、スターラヤ・ルサ文書No一～一三］》

В. Л. Янин, А. А. Зализняк. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1977–1983 гг.). М., 1986.《B・Л・ヤニン、A・A・ザリズニャーク『ノヴゴロド白樺文書（一九七七～八三年発掘）』（モスクワ　一九八六）［文書No五四〇～六一四、スターラヤ・ルサ文書No一四］》

В. Л. Янин, А. А. Зализняк. Новгородские грамоты на бересте (из раскопок 1984–1989 гг.). М., 1993.《B・Л・ヤニン、A・A・ザリズニャーク『ノヴゴロド白樺文書（一九八四～八九年発掘）』（モスクワ　一九九三）［文書No六一五～七一〇、スターラヤ・ルサ文書No一五～一三］》

В. Л. Янин, А. А. Зализняк. Берестяные грамоты из новгородских раскопок 1990–1993 гг., “Вопросы языкознания”, 1994, No. 3.《B・Л・ヤニン、A・A・ザリズニャーク「白樺文書。一九九〇～一九九三年ノヴゴロド発掘」《言語学の諸問題》一九九四年三号．［文書No七一〇、七一三、七一五、七一七、七一八、七二二～二五、七二七、七三一、七三四～三六、七四五、七四八～五〇、七五二］》

А. А. Зализняк. Древненовгородский диалект. М., 1995.《A・A・ザリズニャーク『古代ノヴゴロド方言』（モスクワ　一九九五）》

訳註

（1）モスクワ大学歴史学部考古学講座主任教授　歴史学博士　ロシア科学アカデミー会員（一九九二年より）、科学アカデミー常任委員会委員、ノヴゴロド考古学発掘調査隊長（一九六二年より）。ソ連時代には国家賞、レーニン賞受賞。一九九一年の変革後もロモノソフ・デミドフ賞（一九九三年）を受賞。年代記や諸文書などの記録史料のほか、印章学、貨幣学、碑銘学、地名学、史料学、白樺文書など、考古学分野と歴史学分野の幅広い史料を複合的に利用しつつ、中世ノヴゴロド史に関する多くの注目すべき成果をあげた。刊行された業績数は約五〇〇点を数え、その仕事はロシアだけでなく、ヨーロッパでもよく知られている。一九二九年生まれ。

（2）A・B・アルツィホフスキー（一九〇二～一九六二）はモスクワ大学歴史学部考古学講座の主任教授で、ヤニン教授の前任者であり師でもある。ロモノソフ賞と国家賞を受賞し、ソビエト科学アカデミー準会員。中世ノヴゴロド考古学の事実上の定礎者といってよく、モスクワ大学のノヴゴロド考古学発掘調査隊は彼の時代に定着した。一九五一年から現在までに発見されたノヴゴロド白樺文書は合計九巻の史料集に刊行されてきたが、最初の巻から第六巻目まで（文書No一～四〇五）はアルツィホフスキーの責任で編集刊行された。ヤニンの責任で編集刊行されたものは最近の三巻（文書No四〇六～七一〇）である。

（3）一九九六年の発掘シーズン（六～八月）にはトロイツキー発掘で合計一六枚が出土したので、現在のノヴゴロド文書の枚数は七七五枚である。しかし、一九九〇年以降に発掘されたNo七一一～七七五の文書については、まだ正式には刊行されていない。

（4）スターラヤ・ルサはノヴゴロドの南一〇〇キロほどの場所に位置する小都市で、イリメニ湖に流入するポリスチ河畔に位置する。一二～一五世紀の共和政時代にはノヴゴロド属州内にあった付属都市（プリゴロド）の一つ。中世のスターラヤ・ルサはノヴゴロドに塩を供給する重要な商業都市でもあった。

（5）ノヴゴロドの南西四〇〇キロほどのドニエプル河畔に位置する西部ロシアの都市で、中世にはスモレンスク公国の首都。ドニエプル川とロバチ川でノヴゴロド、西ドヴィナ川でバルト海、ヴォルガ川で東北ロシアや東方と結び付いており、商業都市としても繁栄した。一二～一三世紀には政治的にも大きな影響力をもち、一三世紀には最大版図に達したが、モンゴルによる打撃が大きく一五世紀始めにリトア＝ポーランド国家に吸収された。

（6）ロシアの最西端、エストニアとの国境にも近いヴェリカヤ河畔に位置する古い都市。一二～一五世紀にはノヴゴロドとならぶ北西ロシアの共和政的都市国家の首都で、ハンザとの貿易によって栄えた国際的商業都市でもあった。もともとノヴゴロドに従属する付属都市の一つだったが、独自の発展を遂げて一三世紀には事実上、最終的には一四世紀（一三四八年）に独立の都市国家になったとされる。しかしヤニン教授は最近、このような通説を批判してプスコフは非常に古い時代から事実上ノヴゴロドに隷属してはいなかったという理解を示して、学界を驚かせた。

（7）ノヴゴロドと東北ルーシや東方との交易ルート上にあって繁栄したヴォルガ上流の都市で、中世トヴェリ公国の首都。トヴェリ公国は一三～一五世紀のモンゴル支配時代を通じて東北ロシアの中心的政治勢力の一つとなり、特に一四世紀半ばまで大公権を競い合ったモスクワの最大のライバルだった。共和政時代のノヴゴロドとの政治＝経済関係もきわめて密接だった。

（8）ベルカ河畔の古い都市ズヴェニゴロド・ガリツキーのこと。一一世紀後半以後、ガーリチ公国内の小都市として年代記に言及され、一三世紀前半にはガーリチ・ヴォルイニ公国の都市となるがモンゴルによ

る征服活動により一三世紀中葉に衰退した。現在はウクライナに属する。

(9) 「ヴァリャーグからギリシャへの道」と呼ばれた南北交易路上の西ドヴィナ河畔に位置する古い都市で、一一世紀にはポロツク公国、一二世紀にはヴィテプスク公国の都市として年代記に言及され、中世にはリガを始めバルト海のハンザ諸都市と活発な交易を行う。一四世紀前半にリトア公国に吸収された。

(10) ムスチスラヴリは、一二世紀末にスモレンスク公国内の南部に成立した分領公国（ムスチラフ公国）の首都だった都市で、ソジ河の支流ヴィフラ河畔に位置する。都市の名は最初の分領公が、ロスチララフ・ムスチスラヴィチ公の孫ムスチスラフだったことによる。一四世紀後半、オリゲルドによりリトア公国に併合された。

(11) ここで都市の位置を示すのに著者は現在の領土・民族区分であるウクライナ、ベラルーシなどの用語を用いて説明しているが、ノヴゴロドの白樺文書が出土する一一～一五世紀には無論まだこのような民族や領域の区分は存在しない。モンゴル支配を契機に旧キエフ国家領土内にあった東スラヴ人が東西に分断され、一四～一五世紀以後、東にはモスクワ国家に統合されていく東北ロシアの東スラヴ人が次第に後の（大）ロシア民族を形成し、西にはリトアニア・ポーランド国家の政治的支配下に入ってその文化的・政治的影響をうけた東スラヴ人が同じ時期に後のウクライナやベラルーシ民族として成長していったと考えられている。

(12) 二枚のうち一通は一九五二年に出土した一三番目の文書で、一応No一三の番号が付されているがインクの文字は殆ど消えていて判読できなかった。もう一通は一九七二年にスラヴェンスキー区で発見された一五世紀中葉の文書No四九六で、内容はこの当時の政治的事件に関連している。

(13) 骨製、青銅製、木製などのものもあるが大部分は鉄製で、長さ二〇センチほどの先の尖ったペンである。軸ペンの上部は逆三角形をしたヘラの形状をしているものが多い。

(14) ミシニッチイ一族については、この後の本文及び註(28)、(30)などを参照。

(15) ノヴゴロドでは中世の舗装道路の舗装用丸太として使われた松材が大量に、かつ幾世紀にもわたって連続的に出土したため、考古学者と植物学者の協力研究により一〇世紀から一六世紀までの連続的な年輪目盛が完成し、これが白樺文書および一般出土物の年代確定に大きな役割を果たした。

(16) 白樺文書に応用される伝統的な年代確定法とは、主として古文書学ないし古文字学的研究に基づく年代確定を意味している。

(17) 中世ノヴゴロド市の発掘研究が始まって五〇年目にあたる一九八二年に出版された記念論文集のなかで、ヤニンらは過去五〇年間にノヴゴロド市（旧市壁）内で行なわれた総発掘面積二・五ヘクタールから約六〇〇通の白樺文書が出土したことを基準にし、さらに旧市壁内総面積二六〇ヘクタールのうち、中世都市居住地域として積極的に利用されていた面積を約一〇〇ヘクタールと仮定して、なお地中には二四〇〇〇通ほどの文書が残されていると推定した。

(18) ノヴゴロドのアントニエフ修道院の修道輔祭で、聖母教会で聖歌隊指揮者だった人物。このキリクには二つの著作が残されている。一つは一一三六年、彼が二六才のときに書き残した時間、カレンダー、クロノロジーに関する論文で一二世紀の自然科学的、数学的知識を知るうえで貴重な珍しい著作である。もう一つは彼の後期の著作で教区民を導く聴罪司祭としての活動に関わるさまざまな実践的質問と、それに対する当時のノヴゴロド大主教ニフォントの答えから成っている。後者のなかに、ここに書かれているようなキリクの質問が載せられて

いる。

(19) ニフォントは第九代目のノヴゴロド主教（一一三一～五六）で、出自はギリシャ人だったが一二世紀前半のノヴゴロドの政治的、社会的変革に深く関わり、ノヴゴロド教会のキエフ府主教からの自立性と独立性を強めることでノヴゴロド教会史と政治史に大きな足跡を残した。

(20) キリル文字とグラゴール文字は、ビザンツ帝国がスラヴ人地域のキリスト教化政策のためにモラヴィアに送り込んだテッサロニケ出身のキュリロスとメトディオス兄弟およびその弟子たちの間で生まれたが、二種類の文字のうちいずれかはキュリロスが人工的に創作したとされている。キリル文字は当時のギリシャ文字を利用しこれに似せて作られたが、グラゴール文字は全く新しく考案された文字だった。いずれにせよ、九世紀に南スラヴで作られたキリル文字がロシアに伝わったのは、ロシアのキリスト教化（九八八年）と同時であると考えられてきた。ヤニンはここでノヴゴロドでの発掘研究の結果から、キリル文字のロシアへの浸透はキリスト教化以前からだった可能性を示唆している。

(21) 中世に建設された石造教会の漆喰の内壁には、白樺文書を刻んだのと同じ筆具（ピサロないしスティロス）を使って書かれた多くの文字や悪戯書きが残されており、この教会の壁に書かれた文字や絵の悪戯書きは一般にグラフィットと呼ばれ、研究の対象になっている。

(22) 中国からイスラム圏を経て紙がイタリア人の手でヨーロッパに伝えられたのは一三世紀で、同じくイタリア人がクリミア経由でロシアに紙を伝えたのは一四世紀である。一五世紀後半からロシアでも急速に西洋の紙が輸入されて普及する。

(23) むろん一三世紀以前の文書で、後代に紙に筆写された文書は多数ある。羊皮紙に書かれた三通のオリジナル文書とは、ムスチスラフ公とフセヴォロド公によるユリエフ修道院への下賜文書（一一三〇年）、ヴァルラムのフゥチンスキー修道院への寄進文書（一一九二～一二一〇年頃）、クリメントの遺言状（一一七〇年頃）の三通で、いずれもノヴゴロド文書である。

(24) 現代ロシア語では三三のキリル文字が使われているが、ロシアに現存する一一世紀中葉の教会写本では四三文字が使われている。教会スラヴ語ないし古代ロシア語の字母で使われている四三文字は、ギリシャ文字からの借用ないし変形したもの、ヘブライ文字からの借用、キリル文字の一部をさらに変形させたものなどを含む。参考までにその四三文字を示すと以下の通りである。а б в г д є ж ѕ з і и к л м н о п р с т оу ф х ц ч ш щ ъ ы ь ѣ ю ꙗ ѥ ѧ ѩ ѫ ѭ ѯ ѱ ѳ ѵ ѡ

(25) 子供が文字練習用などに用いた蠟版のおもてに、飾り模様としてアルファベットが彫られていたものが出土している。

(26) 二つの文字のうち、キュリロスが人工的に造ったとされる文字がグラゴール文字の方なのか、彼の名に因んでキリル文字と呼ばれている文字の方なのかについてはこれまで論争になってきている。

(27) オラウス・マグヌス（Olaus Magnus）は一六世紀スウェーデンで活躍したローマ・カソリック派の聖職者で、ウプサラ大司教の弟。スウェーデン問題を論じた著作を残したが、晩年はローマで過ごした。

(28) スラヴェンスキー区にあったノヴゴロドの市場には、国内商業および国際商業に関わるさまざまな施設が置かれていたが、西欧及びバルト海地域とノヴゴロドとの交易活動の中心となったゴート商館やドイツ商館もここに置かれていた。まずゴットランド島を拠点とする北欧商人のノヴゴロドにおける居留地となったゴート商館は一二世紀始めに成立し、ハンザ商人の居留地となったドイツ商館は同世紀の末にできたと考えられている。バルト海貿易のハンザによる独占にともなってゴート商館はドイツ商館に吸収され、一体化された。商館は高い丸

太の柵で囲まれ、カソリック教会、商人の宿泊施設、倉庫などを中心にノヴゴロド人の生活から完全に隔離されて生活できる居留地になっていた。

(29) 今のところ、この文書のテキスト及び解釈については何処にも発表されておらず、この論文でもヤニンは文書番号を示していない。

(30) ここでは具体的な名をあげていないが、「白樺文書学」という新しい歴史補助学の成立を提唱した学者として著者が念頭においているのは、リハチョフ、チェレプニンなどの大学者たちである。

(31) ルカおよびユリー・オンツィホロヴィチは、年代記で知られているノヴゴロドの有力貴族ミシニッチイ一族の一四世紀から一五世紀にかけての当主たちの名。一九五一～六二年に行われたネレフスキー区の発掘で出土した屋敷地群から彼ら一族の歴代当主の名が記された白樺文書が数多く発見されたことで、これら屋敷地群のこの一族への帰属が確認された。同じく一九七〇年代に行われたリュージン区のトロイツキー発掘で出土したある一二世紀末の屋敷地が、出土遺物や白樺文書から、ノヴゴロド年代記にも出てくるオリセイ・グレチンというイコン画家の家であることが明らかにされた。いずれも後述の本文参照。

(32) 一九五一～六二年の発掘とはアルツィホフスキーの指揮下で行われた約一ヘクタールに及ぶ「ネレフスキー発掘」のこと。

(33) ネレフスキー区の有力貴族ミシニッチイ一族の家系の当主の名は、年代記など既存の記録資料と、ここで発掘された白樺文書との総合的な分析によって、一三世紀から一五世紀までの合計八世代にわたって明らかにされた。参考まで紹介すると次ぎのようになる。ミーシャ（一三世紀半ば）→ユリー・ミシニッチ（一三一六年死）→ヴァルフォロメイ・ユリエヴィチ（一三四二年死）→ルカ・ヴァルフォロメヴィチ（一三四二年死）→オンツィフォル・ルキニチ（一三六七年死）→ユリー・オンツィフォロヴィチ（一四一七年死）→ミハイル・ユリエヴィチ（一四二一～二年死）→アンドレヤン・ミハイロヴィチおよびニキタ・ミハイロヴィチ（一五世紀半ば）。ミシニッチイという名は一族の祖とされる一三世紀のミーシャ（ミハイルの愛称）による。

(34) ノヴゴロド民会の選挙で選ばれる最高の政治的執行権力で、ポサードニクの名で呼ばれた。最初は任期がなく、一四～一五世紀に一年任期ついで半年任期制になるが、ポサードニクに選出されたのは事実上は五つの区を代表する有力貴族の家系だけに限られ、貴族寡頭制的な政治体制が成立していた。ミシニッチイ一族はそうした有力貴族の一つで、ネレフスキー区を代表して代々ポサードニクを輩出していた。

(35) ネレフスキー発掘では約一ヘクタールの都市居住地域が発掘された。その範囲内に三本の木製舗装道路が出土し、その両側にならぶ屋敷地は、ごく一部分だけのものも含めて合計一三発見された。一三の屋敷地のうち三つはミシニッチイ一族に属したことが白樺文書の分析で明らかになった。

(36) 一般に聖壁ないし聖障と訳される。東方正教会の教会で、至聖所（祭壇のある場所）と聖所（信徒の集まる場所）とを隔てる壁で、ここに多くのイコンが会衆の側に向けて掲げられる。東方正教諸国のうちでもロシアで特に発達した。

(37) 「六翼の天使」とは、三段階九位階に分けられている天上の教会制度で最上級に位する天使セラフィム（熾天使）のこと。イコンに最もよく登場する大天使のミハイルとガブリエルは九位階の下から二番目の地位にあたる。最上位のセラフィムと第二位のケルビム（智天使）もしばしばイコンに描かれるが、セラフィムは六枚の翼を上下左右に広げ、その中心部分に人の顔だけがかき込まれた姿で描かれ、神の王座に仕える天使とされるので、キリスト像の上部などに配されることが多い。

(38) ここでヤニンが主張していることは、人名表の文書で主格形と生格

形が並存している場合には、主格はイコンの注文主の名を、生格は注文主から依頼されたイコンに描くべき聖者名（つまり注文主に関係する守護聖者名など）であると解釈できる、ということである。

(39) ノヴゴロド市の郊外のネレジッツァと呼ばれる場所に現存する最も古い教会の一つで、正式には「主の変容」教会だがスパス＝ネレジッツァ教会と通称される。一一九八年に建立されたシンプルで美しい外観と内壁のフレスコ画で有名だが、第二次大戦中にドイツ軍により著しい被害をうけた。

(40) 中世ロシアの印章は鉛製で、文書の下部に穴をあけて紐を通し、その紐の先端に鉛印章を垂らす形式をとった。文書に付いたままの印章で現存しているものはごくわずかで、大部分は考古学的発掘その他で文書とは切り離されて発見されたものである。

(41) ハルコプラティアはコンスタンチノープルにある広場の名。「ハルコプラティアの聖母」とはここにあった教会の聖母に由来する聖母像の型をさすものと思われるが、詳細は不明。

(42) И・Е・グラバーリ（一八七一～一九六〇）はイコン研究者として著名なソビエト時代の美術史家。国立中央修復所の所長として古いロシア・イコン、特に一一～一四世紀イコンの修復・復元・保存に力を尽くすとともに、ロシアにおけるイコン研究を定着させた。

(43) イワンコはイワンの卑称。中世にはまだ姓がないので、公や貴族身分の者の名を記述する場合には一般に名と父称とで表示する。この場合で言えば、「パーヴェルの息子イワン」を意味するイワン・パヴロヴィチが正規の呼び方であるが、ノヴゴロドの年代記は貴族身分の者であっても、実際に人々が呼んでいた愛称や卑称をそのまま使って記述することがしばしばあった。

(44) ウラジミル・モノマフ（一〇五四～一一二五）はヤロスラフ賢公の孫に当たるキエフ大公（一一一三～二五）。ポロヴェッツ人との戦いに成功を納め、キエフ諸公間の分裂を一時的に押しとどめ、都市暴動の原因になった高利貸しの制限を加えてるなど一定の政治的成果をおさめた。キエフ・ルーシの再統一を図ったが成功せず、彼のあとキエフは最終的な分裂が進行する。息子のムスチスラフ・ヴェリキイは一一二五年にモノマフが死ぬとキエフ大公を継承するが、父の在世中は長くノヴゴロド公の地位にあった。

(45) ラドガ湖への河口に近いヴォルホフ川左岸の要塞都市。ノヴゴロドのバルト貿易ルートにおかれた重要な商業上の拠点都市であり、この交易ルートを防備する戦略的要塞都市でもあって、一二世紀以来堅牢な石の城壁を備えていた。現在は一八世紀にピョートルが建設したノヴァヤ・ラドガと区別してスタラヤ・ラドガと呼ばれる。

(46) 一般に「民会」と訳される市民の政治集会で、ノヴゴロド共和政の最高意志決定機関。市長、千人長、大主教などを選挙で選出し、公の選定や改廃、戦争と和平の決定など重要な政治的決定はこの機関で行われた。

(47) スターラヤ・ルサのこと。注(4)参照。

(48) 外壁に囲まれたノヴゴロドの市街領域は五区と呼ばれる五つの独立的な地域共同体に分かれ、それぞれが独自の自立的な行政機関、民会、財政及び代表者をもち、市全体の代表するノヴゴロドの行政機関を各区からの同数ずつの代表者によって編成することで多くの国家的機能を執行する政治形態をとっており、その意味でノヴゴロド共和政は区を単位とする連邦制国家だったともいえる。

(49) ノヴゴロド大主教を議長とする有力者たちによる会議体で、現役および旧の市長と千人長、スタロスタ、百人長などが参加した。民会で決議すべき問題や議案を予め審議して原案を作成するなど、貴族寡頭制時代のノヴゴロドでは民会に代って事実上の最高決定機関として機能したとされる。

(50) 一四七八年にノヴゴロドが独立を失いモスクワ国家に併合されたあと、イワン三世の政府は旧ノヴゴロド領の土地について悉皆的な土地台帳を作成し、土地と生産者との綿密な記録を行った。これはモスクワ国家が残した最初の本格的な土地記録で、ノヴゴロド共和政末期の土地制度と農業史を知る上で貴重な資料となっている。

(51) 一九五六年にネレフスキー発掘のある屋敷地の一三世紀二〇～三〇年代の地層から、年齢六～七歳の一人の男の子によって書かれた文書と、同じくその子供が樹皮の上に描いた幼い絵が合計一六枚発掘された。一六枚の白樺樹皮は、文字だけを書いたもの（№二〇一、二〇四、二〇七、二〇八）、絵だけを描いたもの、文字と絵の両方を書いたもの（№一九九、二〇〇、二〇二、二〇三、二〇五、二〇六、二一〇）の三種類があるが、アルツィホフスキーは文字の書かれている白樺樹皮だけを白樺文書として扱いナンバーを付している。文字も絵もすべて同一の書き手によるものであることは一目瞭然で、書かれている文字の大部分は、幼い子供が文字の練習のために反復しているアルファベット、自分の名前（オンフィム）、文字や文を習いはじめた子供が最初に教えられる手習い用の短い決り文句、などであった。

(52) 証書とは、ノヴゴロドの例で言えば共和政国家の諸権力が発行する公文書で、通常はペルガモンに書かれ印章が附されている公的に証拠力を備えた書類である。証書には、ノヴゴロドと公との間で取り交わされた契約文書、西方の諸国家やハンザとの国際条約などの国家的・法的な公文書もあれば、土地に関する売買状、交換状、寄進状、遺言状など私人間の私的取り引き文書も含まれる。

(53) アンドレイ・アナトリエヴィチ・ザリズニャークは白樺文書を素材に本格的な言語学的分析を行って新しい成果をあげているモスクワの言語学者で、一九七〇年代後半以後、ヤニンと全面的に協力しつつ研究を進めている。事実、一九八六年と一九九三年に出された最新の二巻の白樺文書資料集は、ヤニンとザリズニャークとの共著の形で刊行され、これら二冊には彼の白樺文書に関する最新の言語学的分析結果が掲載されている。なお、ヤニンが論文末尾の文献目録の最後に挙げているザリズニャークの著書『古代ノヴゴロド方言』（モスクワ　一九九五）は、それらの成果を体系化した最新の著作である。ヤニンがこの部分（白樺文書と北西ロシアのスラヴ人定住問題）で紹介している言語学的研究は、主にこのザリズニャークの著書に基づいている。

(54) リトラはビザンツの重量単位で、ロシアで使われたグリヴナさらに後にはフントの基になったと考える研究者もいる。またマルクは中世では北部ヨーロッパやスカンジナヴィアで使われた重量単位であるが、中世ポーランドなどではグリヴナはマルクと同義で一四世紀にはマルクに代って貨幣＝重量単位となった。

(55) 以上のように、ここでヤニン教授はザリズニャークの言語学的研究をもとに、㈠プスコフ＝ノヴゴロド地方のスラヴ人が南部の東スラヴ人とは起源を異にし、バルト沿岸の西スラヴ族と多くの共通性をもつこと、㈡中世には、この原初的な起源と文化の違いがロシアの北部と南部に異なる社会体制と政治形態とを生み出したこと、㈢しかしこの南北の差異が最終的な形態にまで発展しないうちに、この二つのスラヴ地域は合流してキエフ時代の国家と文化を形成することになったこと、を主張している。このような理解は、キエフ時代の国家および社会の形成史としては、ソビエト時代の通説にはない斬新な見解である。

(56) 一般に白樺の手紙の冒頭は、Поклон、Челоэитие など日本人の手紙でいえば拝啓、粛白などのような語に続いて、発信人と宛名人の名が「誰から誰へ」（от кого к кому）の形で示される形式をとっている。